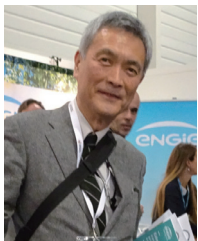




83

きれいな電力の流通を盛んにしよう。
RE100 進める東京都に売電を決めた



小林 光

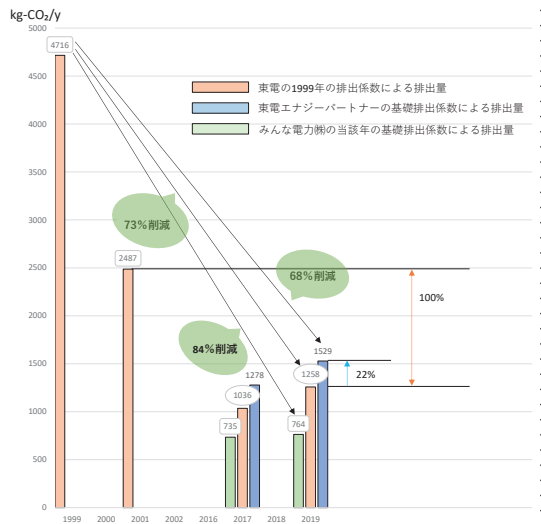
東京大学総合文化研究科客員教授
工学博士・元環境事務次官

我が羽根木エコハウスではこの冬から、余剰太陽光発電（P V）の売電先を東京都（正確には出光グリーンパワーに売り、同社が東京都の施設に供給する）に替えることにした。これは、我が家からの売電が、それまでよりも 2.5 円 / kWh 高く買い上げてもらえることを意味している。さらに、東京都はこの単価には、1.5 円の環境価値分が入っていると述べているので、環境価値を他社よりも高く認識していただいたことになり、とても嬉しい。私だけではない、東京都の方針に賛同し、東京都に売電することを選ぶ方々は順調に増えていると聞く。

我が家では北屋根に P V パネルを設置しているので発電量は少なく、元々、売電量はわずかである。その上、本紙 10 月 15 日号掲載の本欄で紹介したとおり、売電分を蓄電し、買電を減らす工事をしてしまった。東京都には申し訳ない。私としては、売電を減らし、その分、買電を減らすことで我が家の CO₂ 排出量を減らしたかったのである。それでも、買電量が残る以上、我が家に帰属する CO₂ 排出量はなお引き続き存在する。他人様に環境保全を説く以上は「お前は、きれいな電気を買っているんだろうな」と聞かれるに違いない。質問は正当である。2016 年の電力小売り自由化以前は、消費者には、電力会社を選ぶ自由はなかったが、その後は、漫然、従来の一般電力送配電会社から購入するにせよ、それは、消費者本人の選択の結果となった。我が家では、小売り自由化に合わせて、グリーンな電力の配電に熱心な、みんな電力からの買電にさっそく切り替えた。

ここで、我が家の電力起源の CO₂ 排出量の推移において、住み手自身の省エネ対策の進展と供給を受ける電力の排出係数とがどのように影響してきたかを振り返ってみよう。

電力起源の CO₂ 排出量は、グラフのとおり
の推移である。仮に購入電力の排出係数 (kg-CO₂ / kWh) が羽根木エコハウスの建築前年と同じまま
だと計算した排出量の減少は、様々な省エネ
対策の成果を示すものであって、例えば建て替え
直後の 01 年の排出量に比べ 19 年はほぼ 5 割の減
になっている。思えば、よくも省エネを進めた
ものである。17 年以降は、みんな電力が公表した
排出係数によって計算した排出量と、東電エ
ナジーパートナー社の公表している排出係数で
計算したものとを併記した。ここで見るように、
きれいな電力を選ばないと、消費者サイドの省
エネ努力の成果の 5 分の 1 が奪われてしまうほどの
悪影響が生じる。残念なことに 19 年の東電の排



羽根木エコハウスの電力起源 CO₂ の推移

(注 1) 1999 年の排出量は、2000 年以降と一緒に住んだ老親世帯分を含む二世帯の値。

(注 2) 2017 年の排出量が少い理由は、小林が後半半年渡米で日本不在だったため。

出係数は 1999 年よりも悪化しており、その分余分に、東電の発電所から排出される CO₂ が消費者に強制的に割り当てられるためである。他方で、きれいな電力を選べば、削減率は 10% ポイントほどの深堀りになる。電力排出係数の影響はことほどさように大きく、きれいな電力の供給を選択することは重要だ。

企業にとっては RE 100 を目指さないでは、国際市場への入場切符を得ることはかなわない。そして、日本でも 2050 年に CO₂ 排出量を実質ゼロにするとの号砲が鳴った。米国もパリ協定に復帰し、地球温暖化対策は世界的に強化の勢いが高まろう。そうは言っても再エネ起源の電力を増やすには時間がかかる。皆が、まず節電に努めた上で、再エネ電力の取引を盛んにして、日本国内のできるだけ多くの経済社会主体が RE 100 を達成することを支援していかなければならない。再エネ電力取引が円滑にできることこそを主眼にして、送配電事業の開放、新設の電力容量市場のグリーン化などに取り組んで欲しいものである。